末黒野

すぐろの

9月号（通巻817号）

末黒野　平成二十六年九月五日発行　第六十九巻第九号（通巻八一七号）

老鶯

小川玉泉

炊きたての飯のふつくら梅雨に入る

半世紀経たる座敷へ守宮の子

わが気配捉へ動かぬ蟇

朝日さす机辺に点り蚊遣香

大正の振子時計の音涼し

雨風の止む気配なし花柘榴

今朝霽れて朱を鮮やかに花ざくろ

捗らぬ選句鶯老いを鳴く

庭に来て老鶯別れ告ぐるかに

節回しよき老鶯や地鎮祭

黙々と老いの操るぬなわ舟

昼寝覚雀の声の新しく

平手打ち

松本三千夫

暁闇を裂きてふた声ほととぎす
菖蒲田のいろを沈めて雨滂沱
振り向けばまだ佇つてをり夏帽子
夏落葉基地の鉄扉の錠錆びて
滴りや鳥語明るきやぐら墓
横綱碑頬の藪蚊を平手打ち
南部江戸と風鈴二つ音ふたつ
男ばかりのバーの止まり木桜桃忌
星涼し妻二杯目のロゼワイン
夏木立起伏の多き島の道
冷麦に一筋の紅箸を割る
夏蝶の発てりどの花より白く

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

蛍の夜

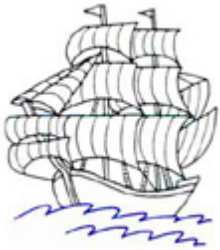
森清信子

風上り来る千枚の植田かな
白浪の巌に砕け花梯梧
川風に錆のにほひや夕薄暑
言訳はもう大概に生ビール
湧水の軽き水音明易し
薫風の野によみがへり詩心
滴りに苔の匂ひの移りをり
振り向かぬ背に背をむけぬ蛍の夜
行く雲を窓に灯ともす梅雨の入り
踊り出す仕掛け時計や豆御飯

余花の雨

安斎久英

営門の銹の深むや走り梅雨
時の日の時を刻める水車かな
中空に鳶の自在や若葉風
渓底の深さは知れず余花の雨
群青の空織り込みて滝飛沫
浪子不動へ道なき道や青嵐
履き馴れぬ靴の重さよ夕薄暑
青鷺の置き物めくや渚道
雨三日花梔子の銹色に
山峡の捨田を満たす山清水



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

遠閑古　中野久雄

老鶯の声が背押す九十九折
賑はひし城址の桜実となりぬ
遠閑古バス乗り継ぎの県境
あぢさゐの紫深む通り雨
雨上がり浮かべる梅雨の月まどか
夏炉焚く峡の藁屋の手斧梁
音すれど見えぬ流れや草茂る

梅雨寒　西川みほ

蜂の巣を軒に末寺や低庇
水神の機嫌まかせに花藻舞ふ
植田はや縞すつきりと成しにけり
余り苗を褥代りに青蛙
山清水引き込み峡の暮しかな
風鈴の音を気兼ねに街住ひ
梅雨寒や病む友に嘘つき通し

ロゼ

森清堯

点描めく桂若葉や湖の紺
山門を凌ぎ泰山木の花
湧水を五指より零し新樹光
軽鳧の子の列に戻れる迅さかな
見上ぐれば中空に満ちえごの花
岩陰ゆ渡しの舳先卯波立つ
ロゼ注ぐグラスの気泡みどりの夜

春の海

吉田きみえ

孫と子の旅の一夜の明易し
帆かけ舟競ひて春の海平ら
春の月下駄を鳴らして露天湯へ
新緑の木蔭や憩ふ乳母車
小半時石の小亀の甲羅干し
春の蝶風のままなる番かな
子の呉れし指輪のゆるみ春惜しむ

薔薇

石黒興平

檣灯の一つ一つの朧かな
初夏の風の抜けゆく牛舎かな
触れてみるヘップバーンといふ薔薇に
ひとときを薔薇のアーチの木洩れ日に
麦秋や没日に急ぐ貨車の列
麦刈や若き農夫のつなぎ服
雲映る水へこませて水馬

新樹光

岡田史女

寄りあうて五百羅漢や蜘蛛の糸
蔵町の蔵の連なり花うつぎ
刃物屋の軒の深さや夏つばめ
少年のとんぼ返りや新樹光
湖に波立ちさはぐ麦の秋
万緑や森を抜けきしサキソホン
黒南風や昼を点して針仕事

青炎集

小川玉泉選

大網白里　岡井マスミ

鱚と答ふ釣人海を向きしまま
詰め合へる丸太のベンチ楓の花
寄り道を重ぬる古道花樗
ゆき交はす帽子目深に行行子
短夜の夢に会ひたるちち若し
草を取る迷ひ剥ぎとるさまに似て

横浜　前川美智子

花海桐沖の白帆の遠ざかる
利根川をはさみ早苗田ひろごれり
無人駅続く路線や麦の秋
老杉の夏日さへぎる神の苑
新緑の風一吹きや露天風呂
たそがるる門前町や夏燕

横浜　田村加代

結び葉の川面をおほひ橋の下
嘴合はす鳩青芝の中庭に
母の日に貰ひし帽子使ひ初め
絵手紙や庭のどくだみ摘みて画く
落梅の傷一つなき丸みかな
花の色白ではじまる七変化

横浜　川村亘子

著莪咲いて水の匂ひの寺苑かな
夕暮や雨蕭蕭と梅雨に入る
勤行の鐘紫陽花の苑昏るる
梅雨空や水の重さの深轍
絵タイルの姑娘濡らす五月雨
梅雨深し久し振りなる針仕事

横浜　山崎稔子

雪残る富士真向ひや夏燕
雛に餌をはこぶ青鷺松の末
新緑や白亜の石の供養塔
帽子飛ばす茅花ながしや雨催ひ
母の日やこれまでになきプレゼント
何時になく長き汽笛や夕薄暑

横須賀　大川暉美

夏草をわけて杭打つ測量士
初夏の日の濃き湾の白帆かな
老鶯や朝の谷戸をほしいまま
著我の花群るる堂裏雨催ひ
真青なる空を放さず針槐
峡深き空突き抜けて時鳥

横浜　鈴木鞠子

球蹴る子鬼ごつこの子鯉幟
竹の子のゆがき加減や小半時
色数多つつじを守る旧家かな
湿原やほしいままなる蟇の声
老鶯の声の古刹をつつみけり
久に訪ふ墓苑小道の竹落葉

横浜　青木由芙

藤若葉のそよぎて日矢を揺らしけり
笹の葉に翅をたためり黒揚羽
風落ちて山湖に夏の月の影
翠巒の海の青さに勝りけり
菩提寺の池をとよもし牛蛙
滴りを受くる岩間の筧かな

大網白里　鈴木礼子

新緑の眠気を誘ふ心地かな
ははの忌の供花摘む土手やほととぎす
子の大成願ふ泰山木の花
梅雨入りの海鳴り一里越えて来ぬ
日輪の真下燃え立つ松葉菊
時の日や我が誕生の日を祝がれ

横浜　真柄百合子

産土神の藤の花房仰ぎけり
一杯の水呑み終へて母子草
沖を目指すヨットの白帆刃めく
ボート漕ぐ競争相手若からず
天空のはるかな余韻桐の花
紫陽花を見て来し人の半跏趺坐

耕土集

松本三千夫選

横浜　飯田久美子

百人の眼引き寄す白牡丹
喜憂なく只ひらひらと竹落葉
ありのままたじろぎもせず黒揚羽
枇杷甘し種はころんところころと
斑点を甘さの目安バナナ食む

石田　朝子

夕闇に灯るが如く野萱草
さくらんぼ一粒食べて先の事
着廻しを楽しみ夏へ衣替え
明日開く菖蒲数へて雨戸閉づ
昼寝覚めこの世に戻る安堵かな

野村　重子

雨粒か鯉の吐息か未草
狂ほしく初ほととぎす闇を縫ふ
江ノ電の木の床ゆかし夏は来ぬ
薔薇抱く山懐の文学館
青枇杷の屋根に落ちたり二度三度

横浜　高橋志津代

消防士のロープ訓練夏の空
黄菖蒲や流れにそひて谷戸の径
野茨の白の浮き立つ宵の径
卯の花を挿頭す少女のうなじかな
谷戸の径紅一点の花ざくろ

中村　弘

逆に差す傘を目途に梅落す
水害の被害各地に五月雨
清長の細身の美女や庭石菖
風薫る十字の石碑整然と
蟻の脚鋼の如く地を削り

柏　渕田　則子

和太鼓の音に震へて花しやうぶ
昃りて色生き返る菖蒲園
土間涼し太き柱の触り艶
青田風一人占めして丘の椅子
夕焼へ消え行く船や忘れ潮